

越中万葉集

題字 中尾哲雄

3



万葉集を編纂した大伴家持は、天平十八年(七四六年)から五年間、越中の国守を務めました。当時の越中は、家持が「しなざる越」と詠んだように、奈良の都から遠く離れた鄙の地。都とは異なる風土の中で家持は多くの歌を詠みました。万葉集に残る家持の歌四七三首のうち、五年間の在任中に詠まれたものは実に二二三首にのほります。



富山市東岩瀬諏訪神社 入口の歌碑



高岡市野村小学校前庭の歌碑

石瀬野は、富山市東岩瀬町地区とする説と、高岡市石瀬(いしぜ)地区とする説とがあります。文献を片手に古典の謎を解明するのも楽しみの一つです。



石瀬野に

秋萩しのぎ

馬並めて

初鳥狩だに

せずや別れむ

大伴家持

揮毫 江幡 春濤(日展会友 毎日書道展審査委員)

石瀬野に 秋萩しのぎ 馬並めて

初鳥狩だに せずや別れむ
大伴家持(巻十九・四二四九)

《歌の解説》

萩は秋の七草のひとつで、マメ科の背の低い落葉低木です。日本のほぼ全域に生育し、秋の草とその字を書くように七月から十月にかけて花が咲きます。古くから日本人に親しまれ、『万葉集』でも萩を題材にしたものは一四〇首余りにのほり、最もよくつたわれた植物です。

七五年九月、大伴家持は五年間の越中国守の任を終え、奈良の都へ帰京しました。出立の時、家持は部下の久米広縄(くめのひろなわ)が都への出張で不在のため、惜別の歌二首を彼の館に贈って帰京しました。歌には、越中の自然を惜しむとともに、広縄との狩の思い出を懐かしむ気持ちも詠まれています。後日、家持は帰京の道すがら越前国にて、運よく越中へ帰任する広縄と再会を果たしました。越前国に赴任していた親友の大伴池主とともに三人で食事をし、歌を交わして家持の少納言への昇進を祝ったとされています。